

本パンフレットは、  
下記のHPよりダウンロードすることができます。

長崎県教育庁学芸文化課

<https://www.pref.nagasaki.jp/section/edu-gakubun/>



学芸文化課に関する情報は各種SNSで随時発信しております。  
下記よりぜひご覧ください。

学芸文化課SNS情報



【公式Instagram】  
@ngs\_kengakubun  
[https://www.instagram.com/ngs\\_kengakubun/](https://www.instagram.com/ngs_kengakubun/)



【公式エックス(X、旧ツイッター)】  
@ngs\_kengakubun  
[https://x.com/ngs\\_kengakubun](https://x.com/ngs_kengakubun)

執筆(五十音順・敬称略) | 井形 進(九州歴史資料館)  
伊藤 幸司(九州大学)  
内野 義(松浦市教育委員会)  
川口 洋平(長崎県埋蔵文化財センター)  
高津 孝(放送大学)  
宮武 直人(長崎県埋蔵文化財センター)

デザイン | 株式会社 ビーエス・クリエイティブ

印刷 | (有)立山印刷

発行 | 長崎県教育庁学芸文化課(令和7年9月)

# 「蒙古襲来」と 海の路

～元の軍船の航路を探る～



小値賀・地ノ神嶋神社の宋風獅子



## PROLOGUE

プロローグ

# 「蒙古襲来」と海の路 ～元の軍船の航路を探る～

## 「蒙古襲来」と長崎県の島々

鎌倉時代に起こった「蒙古襲来」（いわゆる元寇）に関わる遺跡としては、暴風で沈んだ元船が見つかった鷹島沖（松浦市）や、博多湾岸に築かれて戦いの舞台となった元寇防塁（福岡市）が知られています。元軍が博多湾や鷹島のある伊万里湾にいたるまでには、対馬・壱岐・五島列島・平戸など現在の長崎県のエリアを経由して侵略しました。これら長崎県の島々も元寇の舞台と言って過言ではありません。



▲元寇防塁（福岡市早良区の西南学院大学付近）



▲祝言島（五島列島北部）

## 江南軍の出港地・慶元（寧波）

中国・浙江省の港町で、一時はムスリム（イスラム）商人も来航するなど国際貿易港として繁栄していました。南宋では明州、元の時代は慶元と呼ばれ、元による日本遠征の際には江南軍の出港地となりました。



▲寧波の古写真（1880年頃）



慶元（寧波）

## 元軍の航路のこれまでの理解

文永の役（1274年）の際には、900隻の艦船が高麗の合浦（現在の馬山市）を発し、対馬の佐須浦を攻めた後、壱岐を経由して博多湾へ向かったとされています。

弘安の役（1281年）の際には、朝鮮半島と中国南部から二手に分かれて艦隊が日本へ向かいました。まず、合浦から東路軍900隻が巨済島を経由し、対馬と壱岐を攻撃して博多湾に向かいますが、防塁を築いて護る幕府軍の抵抗のため、壱岐に後退します。この間、慶元（寧波）から江南軍3500隻が発し、平戸島付近で両軍が合流して博多湾へ向かおうとします。ところが、鷹島沖で暴風に遭い、多くが沈没して壊滅的な被害を受けたとされています。



▲てつほう（松浦市教育委員会提供）

## 元軍の具体的な航路

元の軍船の航路については、文献から出航地はわかりますが、その間の具体的な航路に関しては、詳しいことはわかっておらず、教科書などの地図上では概念的に直線で示されています。では、どのようにすれば、さらに具体的な航路がわかるのでしょうか。今回は、とくに慶元（寧波）からの江南軍の動きに着目し、文献史に加え、いかり石の石材産地や水中遺跡の最新の調査など、様々なアプローチから航路に迫っていきます。

# モンゴル襲来と大洋路

伊藤 幸司(九州大学)

1281年、モンゴルが再度、日本に襲来しました。いわゆる弘安の役です。弘安の役でのモンゴル軍は、6月中旬頃に東路軍と江南軍が壱岐島で合流する計画でした。まず、東路軍が朝鮮半島南岸の合浦を5月3日に出発、6月6日に志賀島に到着するも、博多湾岸に築造された石築地(元寇防塁)のために上陸できず、壱岐島に移動し、江南軍との合流を図りました。江南軍は、6月中旬から下旬に順次、慶元(寧波)を出発、7月に五島列島や平戸に到着し、壱岐から平戸に移動してきた東路軍と合流しました。しかし、7月30日夜からの大風により、鷹島付近の伊万里湾で大被害に見舞われ、遠征は失敗に終わっています。

弘安の役の江南軍は、どのようなルートで日本に渡航したのでしょうか。当時、日本と中国大陆とを結ぶ主要航路は大洋路とよばれていました。大洋路は、京都の東福寺栗棘庵が所蔵する「輿地図」という南宋期の地図に記されており、明州(寧波)—招宝山—昌国—東シナ海—博多を結んでいます。遣唐使が南路で入唐して以降、この航路が日本と唐・宋・元・明との交流を支えていたのです。



▲濟州島

大洋路は、順調に航行すれば、耽羅(濟州島)沖合を通過して、おおよそ1週間から10日程度で東シナ海を横断することができました。耽羅は、大洋路を航行する船舶にとってのランドマークで、

航海安全をもたらす羅漢の島としても有名でした。ただし、岩礁で囲まれた火山島の耽羅は、近づけば座礁の可能性があります、『今昔物語』では人食いの島として描写されるなど、わざわざ寄港するような島ではありませんでした。

中国大陆から日本に渡航する場合、5月の梅雨の晴れ間に吹く南西風を利用するのがよいとされました。もし、この時節を逃すと東シナ海で漂流する可能性が高まるといいます。遣明船の事例をみると、東シナ海さえ無事に横断すれば、南北に長い五島列島を受け皿として帰国することができました。当時の航海は、季節風や潮汐を利用しつつ、海の色・漂流物の有無・海鳥の飛来・島影・水深や海底の状況などで現在地を確認しながらの旅でした。

弘安の役における江南軍は、6月中旬から下旬にかけて次々と慶元を出発し、7月に五島列島や平戸に五月雨式で到着しています。航海日数に鑑みても東シナ海を直行で横断したことは間違いありません。そして、そのルートは、日宋貿易をになう博多綱首が往来した大洋路を使用したと考えられます。大洋路であれば、従前の航海知識を活用して安全かつ確実に渡航できるからです。江南軍は、慶元から6月の南西風を受けて、耽羅を左手に確認しつつ東シナ海を横断し、日本に近づくと五島列島を右手に見つつ平戸方面を目指したのでしょう。

[参考文献]

- ・伊藤幸司2013「入明記からみた東アジアの海域交流」『寧波と博多』汲古書院
- ・伊藤幸司2021『中世の博多とアジア』勉誠出版
- ・榎本渉2008「日宋・日元交通における高麗」『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』東京大学(科研報告書)
- ・藤田明良2001「高麗・朝鮮前期の海域交流と濟州島」『青丘学術論集』19
- ・森克己2009「新編森克己著作選集2 続日宋貿易の研究」勉誠出版



▲濟州島～五島付近の略図



# モンゴル襲来と碇石

高津 孝(放送大学)

鷹島海底遺跡から、木製碇が引き上げられたことは、大変な衝撃でした。その他の出土物と合わせ、モンゴル軍が残したものと確定できる遺物の出現は、元寇研究に大きな影響を与えました。ここでは、木製碇およびそれに装着されていた碇石に焦点を当てて、モンゴル軍の航路について見ていきましょう。碇が鉄製に変化する以前、10世紀から15世紀までの中国船の碇は、木製の杵に重りとしての碇石を装着した木石碇でした。木杵は容易に腐食するため、今回のように現物が発見されたのは極めて珍しい例です。それ以前は蒙古襲来絵詞などの絵画に描かれたものを参考に推定が為されていました。図版1は九州国立博物館に展示されている鷹島出土木製碇の複製品ですが、大きいですね。このような大きな碇は当然大きな船に装着されていました。40m級の巨大なモンゴル軍外洋船が鷹島の海上に多数集結したさまは恐怖を感じさせるものであったと思います。

石原渉『碇の文化史』(思文閣出版、2015年)によれば、船の大型化に伴い、角柱状碇石の大型化が進んだのですが、大型化の問題点として、船に引き揚げきれない、スペースを取る、岩礁に根係りしやすいという点がありました。そのため、両翼を細身にする、左右二つに分離する(二石型)という方向に変化したと推定されています。鷹島出土の碇石は、二石型が多く、最新型の碇を装着していたことになります。

碇は船の建造と同時に建造地で作成されたと考えられます。とするならば、碇は船の建造地を示すものとなります。モンゴル軍船はどこで建造されたのでしょうか。『元史』によれば、世祖(フビライ)至元16年(1279)に日本遠征のため、揚

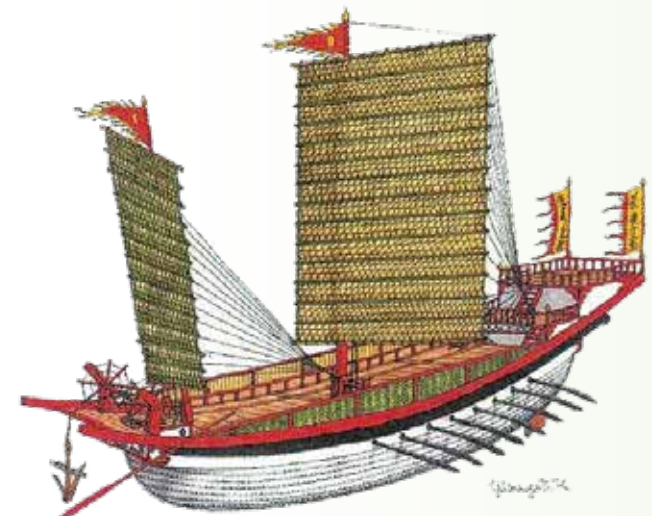


▲図版1 モンゴル軍船のいかり(九州国立博物館展示)

州、湖南、贛州、泉州の四つの都市で戦船六百艘を建造せよとの勅令が出されています。この年は、南宋滅亡の年で、次は日本を攻めるという決定でした。四つの都市は、現在の江蘇省揚州市、湖南省長沙市、江西省贛州市、福建省泉州市にあたり、前三者が内陸河川沿いの都市、最後の一つが外洋港です。日本へやってきた軍船は、すべてが外洋航海に適した外洋船(竜骨船)ではなかった可能性があります。

現在日本で発見された碇石は約70数本が知られており、石材は様々ですが、浙江省寧波市近郊の方岩組地層に由来すると推定される凝灰質砂岩製のものが20本、福建省泉州に由来すると推定される花崗岩製のものが12本で多数を占めます。これらは10世紀から15世紀にかけての貿易船が残したものと推定されています。鷹島海底遺跡から出土した碇石にも凝灰質砂岩、花崗岩が見られ、寧波、泉州の軍船がきたことを示しています。外洋船の建造がなされた泉州、江南軍の出発地である慶元府(南宋までは明州、明以降は寧波と言う)の軍船が参加していたことは確実です。

江南軍は慶元府(寧波)を出港して7日程度で日本に到着したとされますが、どういうルートを通して鷹島に到達したのでしょうか。これを推定するのに二つの資料があります。一つは碇石で、小値賀島、平戸島でも発見されており、当時の中国からの貿易航路であったことが分かります。いま一つが薩摩塔で、これは13世紀から14世紀前半の中国系石塔で、九州西部に分布し、中国海商と深い関係を持った遺物と推定されています。薩摩塔は宇久島で1基、平戸市で13基発見されており、これらの地域が中国海商の居住地であった可能性が高いと考えられます。モンゴル軍船は既存の貿易ルートをそのまま利用した可能性が高く、慶元府を出発した江南軍は、小値賀島、宇久島、平戸島を経由し、鷹島に到達したと考えられるのです。



元寇(蒙古襲来)

文永の役(1274)と弘安の役(1281)では、文永には謎の撤退を、弘安には突然の大暴風雨のため退いたという[『蒙古襲来絵詞』鎌倉時代後期]

▲図版2 元代の海船  
山形欣哉『歴史の海を走る 中国造船技術の航跡』  
(農山漁村文化協会、2004年)



〈コラム〉

## 対馬と壱岐の古仏から見た蒙古襲来

井形 進(九州歴史資料館)

### はじめに

文永十一年(一二七四)と弘安四年(一二八一)の二度、日本に襲来した元軍は、対馬、壱岐、福岡平野周辺の戦場を焦土としたように伝えられています。しかし、いま現地を歩くと、少なからぬ古仏が遺されているのが目に入ります。ここではこれらの仏像、中でも対馬と壱岐に遺る作例から、蒙古襲来の一面を探っていきます。

### 対馬の激戦地に遺る仏像

元軍最初の上陸地は、対馬海峡西水道に面した小茂田浜でした。その海岸から佐須川を二km程遡った所に法清寺観音堂があり、ここには量感豊かで一木造の構造をした平安時代前期の仏像群や、古式な一木造の構造をしながら円満に整った姿を見せる平安時代後期の仏像群が遺ります。今も十六軀の多きを数えるものの、江戸時代には二十二軀あったといえます。これらは日本の平安仏の範疇に収まりながら、対馬ならではの力強い造形を見せています。平安時代の作ということで、その造像は当然蒙古襲来を遡ります。

なお、法清寺観音堂は、元々は銀山があった鶴野に所在していたとされますが、それは佐須川対岸のすぐ近くで、いずれにせよ仏像群の背景には、銀山や港、また佐須の郡庁などを要とした、古代のこの地の繁栄が想定できます。そして実は、かつての海岸線は今よりも内陸にあり、実際に激戦地となったのは、ま



▲法清寺観音堂の堂内向かって右の古仏群  
真ん中に平安時代前期の像が、左右手前に平安時代後期の像が見える。



▲法清寺観音堂の堂内中央の千手観音立像

さに古仏群の原所在地周辺と考えられています。つまり法清寺観音堂の古仏群は、戦場の真っ只中にいたのです。そのような中での現存を、偶然幸運とか、信仰者が守ったからだ、として説明してしまうことには違和感があります。それらの要素によるところもあるかもしれませんが、実は元軍は、すべてを破壊するような戦い方はしていないのではないのでしょうか。

### 壱岐の要衝に遺る仏像

壱岐には、芦辺港から遠からぬ位置にある、長徳寺の阿弥陀如来立像があります。芦辺港は古来、海の道の要衝であって、それゆえにこそ周辺地域が蒙古襲来に際して戦場になったのでしょう。ちなみに件の像は、明治初めに厩応寺から移坐されたといえます。しかしそうであっても、古来当地に伝わってきた像であることに変わりはありません。像を拝すると、顔立ちは円満で、体つきは丸みを帯びながら抑揚は穏やかで、衣文は浅く丸くさざ波のように静穏で、構造は、頭体の幹部を前後二つの材から彫り出した寄木造です。作風技法ともに平安時代後期の仏像の典型を見せており、造像は十二世紀と考えられます。この像もやはり、蒙古襲来の実態を窺う上で大切な生き証人です。



▲長徳寺の阿弥陀如来立像  
檀家以外の拝観は要連絡、要身分証提示。

### 結び

古仏群を拝するにつけ、戦闘の実際は、寺社縁起の類や伝説等が語るところとは異なっているように感じられます。南宋や高麗の人々をはじめ、多くの仏教徒を含んでいた元軍にとっても、仏像ないし寺院は、戦時ゆえに積極的な保護の対象などではなくとも、尊重すべき存在と認識されていたのでしょうか。ともあれ古仏から見る限り、元軍は、無意味に破壊の限りを尽くすような戦い方はしていないと思われます。古仏の現存は、蒙古襲来の実態を映し出している可能性があります。その声に耳を傾けて初めて、見えてくる史実があると考えています。



# 江南軍の航路と水中遺跡

宮武 直人(長崎県埋蔵文化財センター)

長崎県では現在、県内の水中遺跡の所在の有無を把握するために、広く基礎的な調査を展開しています。その中には、「元寇」と時代が重なる中世と考えられる成果も含まれています。今回は、モンゴル襲来の航路を考えるヒントになる遺跡をいくつかご紹介します。

五島列島中通島の西北に相瀬海底遺跡があります。相瀬海底遺跡は、青方浦の沖合4キロの祝言島の南側海域にあって、石で作られた船のいかりが2本発見されています。発見されたいかり石は、約2mの角柱方形のかたちで、その特徴から宋元代の交易船の装備品とみられます。このようないかり石は、小値賀島や平戸島南端の宮ノ浦でも見つかっており、元軍襲来前後にこれら地域を経由して交易船が活発に往来していたことが分かります。

また、いかり石が分布する島嶼部沿岸では、中国から輸入された陶磁器が散布する場所も各



▲調査風景 相浦海底遺跡で発見されたいかり石

地にあります。小値賀島や宇久島西岸には、中国製の陶磁器が出土する遺跡が特に濃密に分布することで知られており、大陸から多くの文物がもたらされていたようです。

弘安の役では、モンゴルに降った南宋から多数の水夫や水先案内人が徴用されたことでしょう。南宋軍は、平時に利用していた海路を辿り、一路博多湾を目指したのではないのでしょうか。



▲上五島～小値賀・宇久～平戸付近の略図



▲小値賀島・前方湾海底出土遺物



▲宇久島・飯良海岸調査風景



▲宇久島・飯良海岸採集の中国青磁



## 元の軍船の終着地・鷹島

内野 義(松浦市教育委員会文化財課)

鷹島海底遺跡は、長崎県北部松浦市鷹島の南岸海域に位置する蒙古襲来(元寇)の古戦場跡です。1980年から調査が始まり、港湾工事に伴う緊急発掘調査、学術研究調査によって、海底から蒙古襲来に関する貴重な遺物が確認されています。

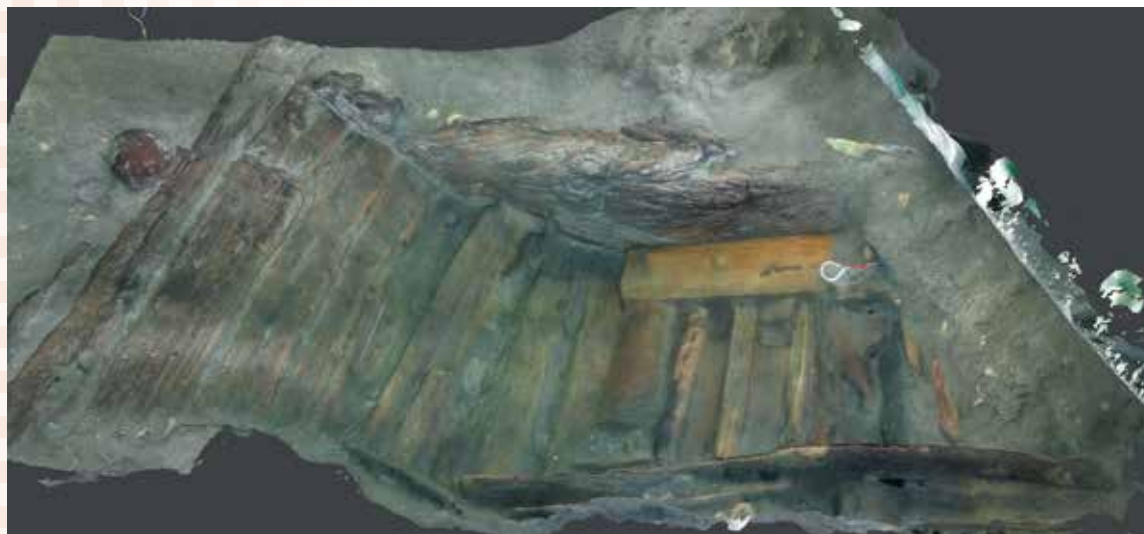
2011年には水深23mの海底で元軍の沈没船と考えられる船底の一部「鷹島1号沈没船」が発見され、翌年3月、これまでの調査・研究成果から神崎港沖約384,000㎡が「鷹島神崎遺跡」として、海底遺跡では初めて国の史跡指定を受けました。

2015年には船体の形状をなす2隻目の「鷹島2号沈没船」を確認しました。2023年と2024年に実施した調査では、船底部分の残存が良好な「鷹島3号沈没船」の一部を確認しました。

これら3隻の船は、船底にキール(竜骨)、船体を仕切る隔壁を要する構造であることから、江南軍(中国大陸)の船だと考えられます。



▲鷹島海底遺跡位置図



▲船底・隔壁出土状況(東方向から)(2024.10.8撮影・編集) (松浦市教育委員会提供)

## EPILOGUE

エピローグ

## わかってきた元の軍船の航路

「弘安の役」における元の軍船の航路について、専門家による最新の研究をみてきました。最後に、これらの成果を結び付けて江南軍の航路を推定してみたいと思います。

江南軍は、東路軍から1カ月遅れて6月に中国の慶元(寧波)を出港しました。その後の航路は、文献史から遣唐使も南路として使った「大洋路」であったと考えられ、東シナ海を横断し、左手に見えてくる朝鮮半島沖の耽羅(済州島)をランドマークとしながら五島列島へ向かったと考えられます。そこから先は、考古学によるモノ(物証)からの推測が可能です。五島列島北部から平戸島にかけては、海中や海岸の遺跡で中国船の寄港や遭難をうかがわせる中国産の石材を使ったいかり石や中国産陶磁器がみつっています。祝言島の相瀬海底遺跡と宇久島の飯良海岸については、先に紹介しましたが、小値賀島の前方湾海底遺跡でもいかり石が確認されると共に、数多くの中国産の陶磁器がみつっています。平戸島南部の宮ノ浦の海底でも、中国産の石材を使ったいかり石が引き揚げられており、海岸では中国産陶磁器がみつっています。



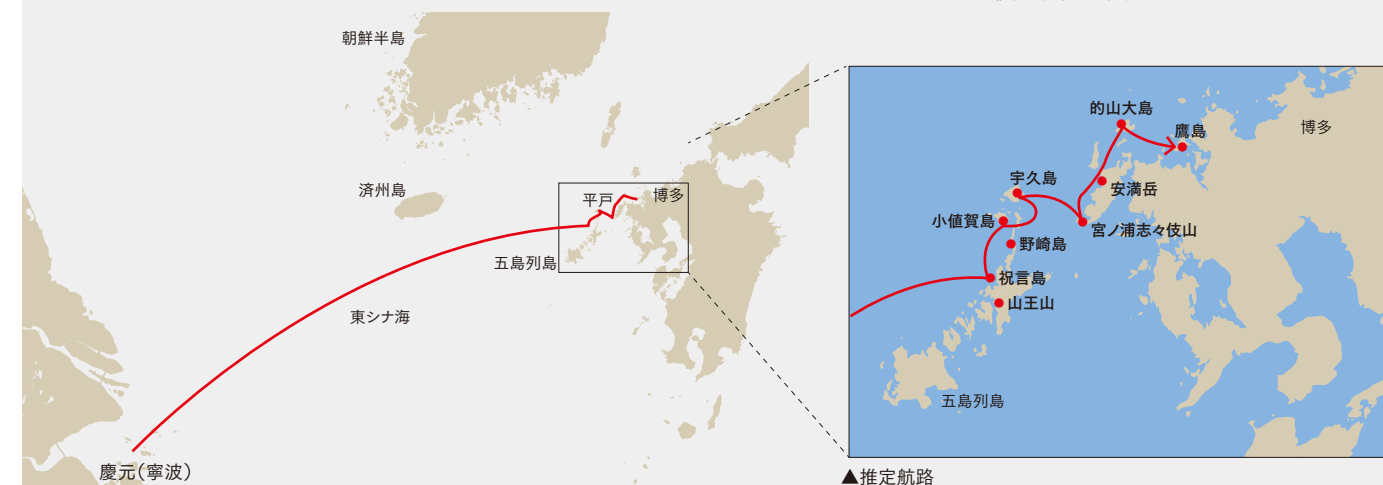
▲雪舟が描いた寧波  
『雪舟唐山勝景畫稿』(東北大学附属図書館蔵)  
出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100348649>



▲中通島・山王山遠景



▲小値賀島・前方湾海底調査



▲推定航路



さらに、これらの島々には山王山(中通島)・平岳(野崎島)・城ヶ岳(宇久島)・志々伎山(平戸島南部)・安満岳(平戸島北部)など海上からはっきりと認識できる特徴的な姿の山が存在し、ゆかりのある神社や寺などから中国産の石材を使った石塔(薩摩塔)や獅子像(宋風獅子像:表紙写真参照)などがみつかっています。中国大陸からの航海者によって奉納されたと考えられ、これらの山々が中国からの船の航海標識(ランドマーク)であると共に、信仰の対象となっていたことがわかります。

これらは中世における平時の貿易航路の物証と考えられますが、弘安の役の際には江南軍も同様の航路をとったと考えられます。五島列島北部の中通島から小値賀島・宇久島を経由し、平戸島南部の宮ノ浦(志々伎)に渡って、北部の安満岳を望みながら、的山大島を横目に伊万里湾へ向かったと考えられるのです。



▲野崎島・平岳遠景(小値賀町)



▲平戸島・志々伎神社の薩摩塔



▲安満岳遠景



▲安満岳の薩摩塔



▲宇久島・毘沙門寺の薩摩塔

## 両軍の合流と鷹島

壱岐で待つ東路軍と五島列島に沿って北上してきた江南軍は、平戸島付近で合流したとされます。合わせて4,400隻、14万人とされる大軍で付近の海域は埋め尽くされたことでしょう。博多に向け、伊万里湾へ移動した元軍を待ち受けていたのは激しい暴風雨でした。鷹島の周辺が元軍の航路の終着点となったのです。



▲鷹島海底遺跡遠景

## 「海的路」の証を訪ねてみよう

元寇における江南軍の航路を探りましたが、その「海的路」を裏付ける物証は、今も美しい長崎県の島々に点在しています。歴史的なストーリー思い返しながらこれらを訪ね、新たな海の魅力を体感してみましょう。

本パンフレットで紹介した考古資料は、こちらの施設でご覧いただけます。



**小値賀町歴史民俗資料館**  
長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷1931番地  
◎開館時間／午前8時30分～午後5時  
◎お問い合わせ／TEL 0959-56-4155



**松浦市立埋蔵文化財センター**  
長崎県松浦市鷹島町神崎免146  
◎開館時間／午前9時～午後5時  
◎お問い合わせ／TEL 0955--48-2098



**新上五島町鯨賓館ミュージアム**  
長崎県南松浦郡新上五島町有川郷578番地36  
◎開館時間／午前9時～午後5時  
◎お問い合わせ／TEL 0959-42-0180



**平戸市・宮ノ浦から引き揚げられたいかり石(平戸市役所玄関前)**  
長崎県平戸市岩の上町1508番地3  
◎お問い合わせ／平戸市文化観光商工部 文化交流課  
TEL 0950-22-9143



**長崎県埋蔵文化財センター**  
長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1  
◎開館時間／午前8時45分～午後5時30分  
◎お問い合わせ／TEL 0920-45-4080

